

ゲシュタルト的空間概念から導かれる空間操作 —横浜ポートサイド地区におけるトリエンナーレ的美術館の一試案—



1 計画主旨

「量より質」の時代を迎えている今日、建築と人の関係を理解する事は欠く事が出来ないと考えられる。空間が人にどのような影響を与えるのか、といったような建築環境心理学のものの見方・考え方を理解することは重要であり、中でも本研究で扱うゲシュタルト的考察は基本である。建築家・芦原義信は「ゲシュタルトの概念は都市のあり方及び内部と外部の設計の質の問題を解く示唆である」と言っている。ゲシュタルト心理学は空間構成を考える時、物の基本的捉え方であり、質を考える設計を行う上で一つの手法である。

次に、今日の社会的背景として、人々はホームページを立ち上げ、路上には音で自分を表現するミュージシャンがいる。表現する事が一部の専門家のものでなく、一般の人にも広がっている。その為、「表現の場」が求められている現状である。

そこで、「デザイン&アート」をコンセプトに掲げる横浜ポートサイド地区全体においてゲシュタルト的考察から空間の秩序立てを行い一般の人の為のトリエンナーレ的美術館としての試案を行った。その際に、発表の場をより人間的にする為にゲシュタルト的空間操作によってトリエンナーレ的美術館として一般の人がアートを表現できる場の中心となる施設の計画をして、ポートサイド地区全体を一つのアートフィールドと考え、フォーリーを分散しまとめた。



写真1：様々な表現をする人達

3 トリエンナーレ的美術館の定義



写真2：横浜トリエンナーレ風景

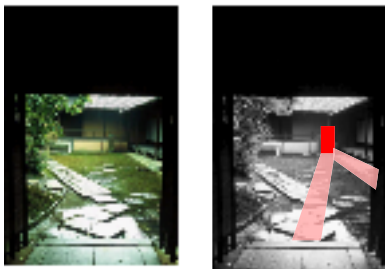
横浜は2001年にトリエンナーレを開催している。本研究の、トリエンナーレ的とは3年に1度と言うことでなく、トリエンナーレのようなサイトスペシフィックな現代アートを基本とした展示、発表が出来、トリエンナーレのような見る人々が楽しめる参加型的美術館である。また、従来の美術館の枠には当てはまらず、一つの施設からなるものでなく、中心施設をアート及び商業地区の一角に設け、アートを楽しむ場の空間の限定化は行わず、ポートサイド地区をアートフィールドとしてフォーリーを分散させ展開していった。

4 ゲシュタルトの定義

ゲシュタルトとは、部分は全体の一要素であり、他の部分要素と関係を築いている。「全体は部分の寄せ集め以上のものである。」また、その一要素に着目した時、それを「ズ・図」と言い、それ以外の要素を「ジ・地」と言う。図は地との関係により自然に逆転し、捉える人により地と図の関係は決まる。



図1：図と地を表す代表的な絵「ルベンの杯」



そして、本研究では「ゲシュタルト性とは図と地が影響しあう関係の事」と定義する。こういった事を空間で考えると、今までの空間の作り方は図に対してばかり着目し、地はただの背景としか捉えられていない。本研究では図と地が影響しあう空間をつくる為、図の部分からではなく、地の部分からの計画で、地と図の関係を改めて再認識し、トリエンナーレ的美術館を設計した。

写真3：左元写真 右分析

ゲシュタルト的な空間分析。事例研究としてゲシュタルト的概念から見た桂離宮の場合。地と図の概念で空間を捉えていくと次のようになる。

5 敷地概要

敷地は横浜ポートサイド地区に位置する。ヨコハマポートサイドを計画地に選定したのは、研究目的である建築環境心理学を考えたとき、地区全体としては明確なコンセプトと計画案を持ちながらも、いまだ地区の活性化は見られずにいることから、環境心理学的な効果を見出そうとする研究に対して有効的であると考えた。

ポートサイド地区はコンセプトとして「アート&デザイン」を掲げ、更に「街づくり協定」が締結され、街づくり協議会も発足された。

だが、横浜駅に隣接しながら、線路や高速道路等で都市が分断され、土地に賑わいが見られないのが現状である。

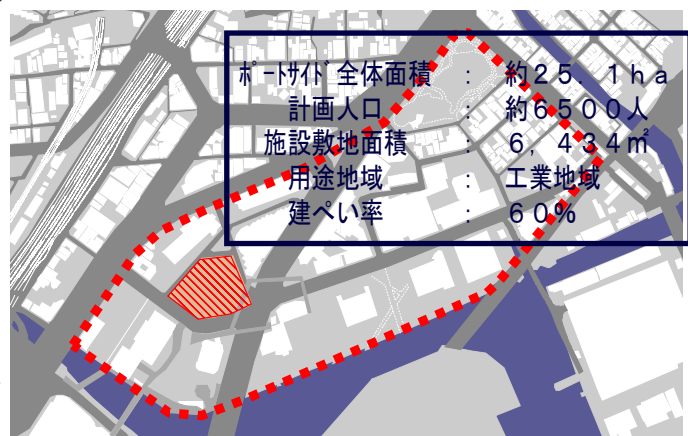


図2：敷地図



施設計画敷地はポートサイド地区の3つのゾーンわけでアートと商業の展開を推進していく西側ゾーンに位置する。スカイウェイが隣接し、ポートサイドの玄関口であり、計画を進めるにあたって、スカイウェイと近隣の金港公園を考慮していく。

図3：施設敷地図(敷地調査図)



写真4：敷地周辺①スカイウェイ ②南側歩道 ③北東側金港公園 ④西側歩道

6 敷地のゲシュタルト性の分析

地区の周辺との係わり合いのコンテクストを読み取る。都市の分析をここでは、道路を一つの都市構成の重要な要素として捉え、それを図として読み取る。地は敷地全体である。そして、①旧東海道の道空間、②横浜西口的道空間、③ポートサイド的の道空間の3つのあり方を読み取った。

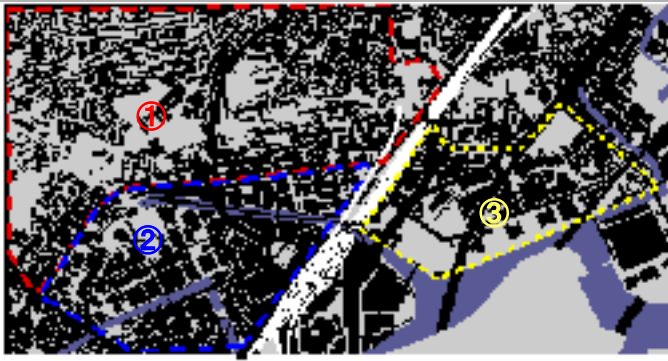


図4：ポートサイド地区周辺図

7 トリエンナーレ的美術館の空間構成

展示作品が環境状況によって作られる為フレキシブルであり、なおサイトスペシフィックになるような空間を作った。製作者により空間が作品の一部となるようにした。また今日、即興的なアートワークは道空間に日常的に発生している。(写真1参照)そこで、屋内空間だけでなく屋外空間も計画の際に検討し、トリエンナーレ的美術館が一般の人に親しみやすく、通り抜け空間のような道空間を組み込んでいく。

施設運営プログラム

『一般の人の(アーティスト、デザイナー等やそういった学問を勉強し作品の展示を望む人) 作品(作品に制限はない。)を発表するための空間』

展示に関する事	フォーリーとしての表現の場の展示に関する事
<ul style="list-style-type: none"> ※ 展示方法(空間)は、定期的に変えていく。 ※ 一般の人の作品展示の為、個展の様にいくつもの作品を必要としない。1作品で良い。 ※ 展示空間の指定は作品製作者で決める。アドバイザーはいるので相談は可能。 ※ 作品は空間にあったサイトスペシフィックなものとする。空間と展示は一体と考える。 ※ 作品に限定はしない。(展示だけでなくパフォーマンス、ワークショップ等でも可。) ※ 地区における現在行われているイベントであるアート縁日には特別に作品の発表、もしくは、今までの作品の流れの展示等。 ※ カフェのインテリアデザインは、半年もしくは一年ごとにアーティストによりひとつの作品として入れ替えていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ※ 地区全体に点在させる。 ※ フォーリーとは、東小屋のことだが、東小屋のような空間を作るというよりも、点在させた発表が出来る場の提案である。 ※ 地区内の地部分(公園・公開空地等非建築部分)に展示、発表の場のステージ的場を作り、そこで発表する側が自由に利用する。 ※ 作品の形態は自由だが、住宅地側に近いところは音楽やパフォーマンス等は時間を規制する。
	施設としての役割
	<ul style="list-style-type: none"> ※ 遠方からの作品発表者が出たら、近隣のホテルとの提携を結び紹介していく。 ※ 施設内の展示管理・展示空間の創作 ※ フォーリーとしての展示場の管理

中心施設内容

- 展示空間(現代アートの一般の人の発表の場、絵画、写真、立体作品等はもちろん映像、音楽、言葉、ダンス、パフォーマンス等の発表の場も含める。)
- カフェ(作品を鑑賞しに来た人、またアーティスト、デザイナーの語らい出合いの場。)
- 事務所(展示品の管理、施設・フォーリーの展示の手続き、施設管理)
- 作品販売所(出展しているひとの販売する作品があれば、委託により販売。(アート縁日の延長))
- 屋外広場(建物の外となる部分のデザイン、外部の公共の場、くつろぎ)
- スロープ(GLレベルとスカイウェイレベルを結ぶ。)

空間構成としては、トリエンナーレ的であるためにフレキシブルな空間を作っていく。サイトスペシフィックとは、ある特定の場所にあわせて作品を作っていくことであるが、この場合同じところでサイトスペシフィックな展示を行う為、製作者により空間自体を自由に作れるようにする。そのために、空間自体には、無数の秩序立てが出来るような、フレキシブルな空間を作る。

8 トリエンナーレ的美術館の展示手法及び展示空間

ゲシュタルト的展示空間を得るための展示手法は、ゲシュタルト的分析を行った事例研究に基づく地と図の関係をもって、その平面的展開を2001年度に行われた横浜トリエンナーレの作品を借りながら試案した。展示に関する作品との地と図は、作品が図となり、展示空間そのものが地となると考える。その大きさは、横浜トリエンナーレのメイン会場パシフィコ横浜で行われた展示手法から、(6m×6m)×2の空間を今回のトリエンナーレ的美術館の基本モジュールにした。

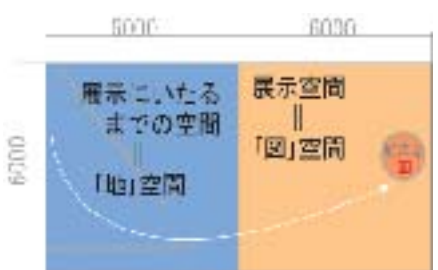


図5：(6m×6m)×2のモジュールの考え方

そして、事例研究から抽出したゲシュタルト的空間操作を基本ルールに沿って展示手法に展開した(図6参照)

展示空間としては、地上レベルではフレキシブルな大空間を持ったもの、スカイウェイレベルでは制約を持ったものとした。

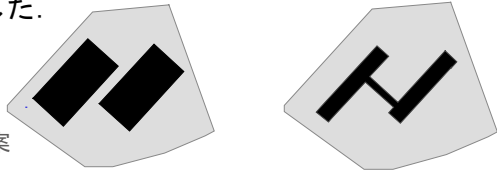


図7: 展示空間提案

1階はパシフィコ横浜的展示空間を作り、大空間で、ブースを設けることで、小さいものフレキシブルな空間

2階は赤レンガ倉庫的に展示空間を作る。小さな制約された空間を作る。フレキシブルな空間とは相反するもの

	case 1	case 2	case 3	case 4	case 5	case 6	case 7	
平面図								
立面図								
パース								
参考事例								
説明	入口に面する壁を少しずらす事で、入口の幅とある程度の距離(ゆがみ)を確保し、空間の広がりを演出している。壁の厚さや開口の位置によって空間の印象も変わる。	片方の壁をずらし、光線が当たるようにする。二階の空間と一階の空間のつながりや、空間の開放感や閉鎖感を演出している。また、天井の構造や照明の配置も空間の印象に大きく影響している。	空間全体をへらへらにつれ、広く開放的な空間を作る。また、二階の空間と一階の空間のつながりや、空間の開放感や閉鎖感を演出している。また、天井の構造や照明の配置も空間の印象に大きく影響している。	閉ざされた通り空間からその奥まで空間を開く。また、二階の空間と一階の空間のつながりや、空間の開放感や閉鎖感を演出している。また、天井の構造や照明の配置も空間の印象に大きく影響している。	1階からのピッチャーウィンドウの開口部を大きくし、二階の空間と一階の空間のつながりや、空間の開放感や閉鎖感を演出している。また、天井の構造や照明の配置も空間の印象に大きく影響している。	事例の上下の階の高さを合わせる。柱や梁の位置や、空間の開放感や閉鎖感を演出している。また、天井の構造や照明の配置も空間の印象に大きく影響している。	通り先の空間が盛り込まれることで、空間の開放感や閉鎖感を演出している。また、天井の構造や照明の配置も空間の印象に大きく影響している。	通り先の空間が盛り込まれることで、空間の開放感や閉鎖感を演出している。また、天井の構造や照明の配置も空間の印象に大きく影響している。

図6: ゲシュタルト的空間操作による展示手法

9 トリエナーレ的美術館の配置計画

敷地の道空間について、周辺のコンテクストから地上レベルの道空間を旧東海道の道空間とし、スカイウェイの道空間にポートサイド的道空間とした。そして、敷地の広場空間に関しては検証の結果、入り組み型を採用した。

配置計画は、敷地の周辺状況と動線などを考慮し、南西側と金港公園側に広場を設けた。南東と南西側にスカイウェイレベルのエントランスを取った。広場とスカイウェイをつなぐスロープの位置は、その勾配を利用して広場に対してバルコニー的な見る見られる関係の出来る配置を考えた。展示空間を2棟にわけ、その間に前記の旧東海道の道空間を作った。そして、二棟をずらし出来た空間の先に検証した広場空間を配置した。それにより、広場空間から道空間を通り、広場空間につながる空間のシーケンスを演出している。

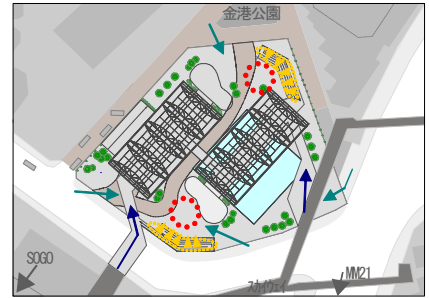


図8: 配置図

10 フレキシブルな空間の創出

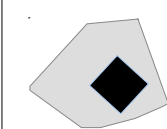
トリエンナーレ的美術館は空間にフレキシブルが求められる為、ランドスケープに関しては、水と陸の対比を作った。水の利用は、自然の変化を細かく分節し、地と図の関係を抽象化できる。壁や屋根の形態としては、ガラスを有するものと有しないものとした。それにより内の内空間、外の内、外の外空間を作りだした。空間の多重性を図った。

そして、構造は大型のトラス構造を採用し、フレキシブルな空間を作り出した。採光についても、全面ガラス屋根を採用し、フレキシブルな展示を可能にした。

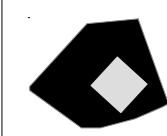
こうしたことにより、トリエンナーレ的美術館は多様な展示空間を作り出す事が出来た。(以下検討の一部)



採光の検討について

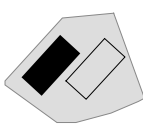


水を図としてみた時水が敷地内に突如現れるので、水は図になりやすい。この水で作品を展開すると水は地となる。

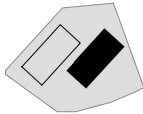


敷地を図としてみた時敷地を図としてみた時、地空間の水は図をきわだたせる役目であるが良い。敷地に関して、図であり、作品により地になる。

敷地のランドスケープの検討について

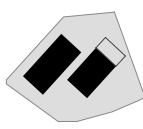


ガラス壁を有するものガラス壁を有するものを図としてみると、内と外とで地と図の関係が生まれる。内の内空間は図になりやすい空間である。

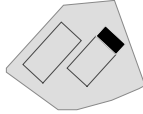


壁を有しないもの壁を有しないものを取り上げてみると、それは図になり独特な空間になる。外の内という空間は図にも地にもなる空間である。

壁の検討について



ガラスの屋根を有するものガラスの屋根を持つものは内の内、内の外となり、図になりやすい空間になる。



ガラスの屋根を有しないもの外の外空間となり、地になりやすい空間になる。

屋根の検討について

構造の検討について



構造は、大空間を作る為、屋根のトラスを採用し、2階に関しては吊り構造を採用(左は吊り構造の形態についての検討)、構造による空間の制限を減らし、トラスデザインとの関係を考えて柱のデザインの検討も試み、そこから柱を、かべ構造になる大きさを採用。

11 展示の可能性

展示に関しては、地上レベルとスカイウェイレベルの展示空間で展開し、そこで仮設の壁・床・天井・家具により展示空間を作品にあったものに作っていく。その可能性の検証としてA~C案を展示プランとして提案する。



写真5: 展示提案 A案モデル



写真6: 展示提案 C案モデル

このように様々な展示空間を展開していけると考える。二階に関しても同様である。作品の数だけ、展示の空間の展開も可能になってくる。

12 トリエンナーレ的美術館とポータルサイト 地区全体の関わり

地区全体計画として、表現の場をフォーリーとして地区に分散させた。フォーリーとは、東小屋のような空間でなく、点在させた発表が出来る場の提案という事である。その際、その場作りを地区の「地」空間で行う。注目されない「地」空間において、表現の場を作る事は、地区の「質」を高める事と地区全体としての活性化につながると考えた。「地」空間においても、地に対しては使われ方により空間の性質は変わってくる。地の中でも、オープンな開かれた空間もあれば、私的な囲われた空間も成立します。

本研究のフォーリーの可能性の場を抽出するのに、「地」の空間の使われ方、空間の「質」を理解する事は重要であり、地区の「地」の空間の調査を行った。そこからフォーリーとしての展示の可能性が考えられる場を抽出した。(図9参照)



図9：フォーリーの可能性の場の抽出

更に、横浜トリエンナーレの作品をかりながら、フォーリーでのアートの可能性の提案を行った。(写真参照)

よって、様々な事が可能であることがわかり、フォーリーとしてのトリエンナーレ的美術館が成り立つ。



写真7：フォーリーの提案①・②・③

13 まとめ

本研究においてゲシュタルト的考えの有効性とそこから生まれる空間操作の検証を部分から全体に、全体から部分に展開し、今日の社会が求める表現の場のあり方についての一試案をまとめた。

更に、地と図の関係に於けるゲシュタルト的建築の展開は、従来建築計画で行われている建ぺい率や容積率とは異なるアプローチであり、今後の建築の「質」の問題を考える上で、非常に社会的に重要視されるべきであると考えます。

